

俳句随想〔三百五〕

汀子

長い歴史を誇る俳誌が創刊何百号という歴史を重ね、その祝賀会が開催される。それには百花繚乱とも言うべき華やぎがあり、おめでたいことである。その反面、俳句総合誌が次々姿を消して行く。世の中、景気がいいのか悪いのか、昔人間にとっては今の世の中の仕組みが理解しにくいのは仕方がないのかも知れない。コンピュータを使いこなす時代に取り残された者たちにとって、横文字で俳句を書いたり、メールで意思を直ぐに相手に届ける術を使ったり、インターネット俳句を募集したり、様々な新しい分野が展げて、そこに新しい世界が拡がって行く現在、俳句はすっかり変ってしまうのであろうか。否々そうではあるまい。不易流行は芭蕉の頃から言われてきた通り、時代の変化に添って行くものと、絶対に変わらないうでいく俳句の根本の思想がある。「花鳥諷詠」は厳然と存在し、守って行かなければならない不易の部分である。

また花鳥諷詠か。と思う人が居るかも知れない。それでも花鳥諷詠なのである。花鳥は自然であり、人間も自然の一部なのである。

旬日記 汀子

平成十八年十一月二日 悼桑田青虎様

露寒の心伝ふるすべのなく
小春日の師の許に今やすらかに
足跡の消ゆることなし石路の花
十一月三日 下朝句会

冬めくや庭に置かれし竹箒
残菊の匂ひの日向吹かれし
十一月四日 関西ホトトギス同人会

秋惜むこの日を待たず逝かれしと
弔間に野山の錦分け入りて
行秋の一日還らぬ人のこと
十一月五日 関西ホトトギス俳句大会

月明り海にほどきて旅寝かな
十一月五日 菅屋カトリック教会五十年
半世紀とは一瞬の小六月

思ひ出を語り尽くさん秋惜む
若き日々遥けくありぬ冬近し
君逝きし日を偲びつつ露寒し
露の世を生き行く神のみこころ
十一月六日 ロイヤル俳壇

秋惜む心に添はぬ一日かな
紅葉ともうすもみぢならざるはなし
鹿よぎる古都の静寂の中にあ
紅葉して人工島に月日置く
十一月七日 上田一粒句集序句

城端に小鳥来てゐる寿ぎ心
十一月九日 清交社

冬構すなほち整理はじめけり
枯葉踏む音も家居の一部分り
夜は静寂枯葉降る音いざなへる
外すもの加ふものあり冬構

十一月十日 工業倶楽部

風音に加はつてゐし木の葉かな
半世紀とて一瞬や小六月
沖波同じしまひし海の小春風
神渡りして旅路となりしこと
十一月十一日 山口八国民文化祭

神渡雨をともなひ来りけり
十一月十四日 大阪倶楽部
初霜の気配漲りはじめけり
初霜の便り届かぬまま逝かれ
すぐ掃いてしまはれぬ散紅葉
眺聞の一步初霜踏んでをり
役に立つとも思はれぬ風除も
紅葉散る風に添ふときそはぬとき
十一月十四日 綿業倶楽部

正面と見れば正面石路の花
石路の花より追憶のはじまりし
十一月十五日 夏潮句会

子規偲び柿熟るるまま落ちるま
子規の見しときも小春の古都ならむ
未枯るるものにも秩序ありし庭
伽石の語るの夜は吹く風も
今木の葉しぐれ先立て風の音
空耳に木の葉しぐれの加はりぬ
十一月十五日 奈良ホテル

枯花には招かれて行くことに
尼寺といふ静けさと露けさと
夕風に散る紅葉又枯葉
一枚に残る夕空散尾花
このままで別るは惜し暖炉の間
十一月十八日 中国ホトトギス同人会

寒さあなどれぬ旅路と心得て
乗り継ぎて行くは寒さへ向かふ
色尽しゆくは車窓の冬紅葉
極めたる紅葉へ極めゆくもみぢ
箱谷へ野山の錦至りけり
幕落ちて大山の雪現はる
十一月十九日 中国ホトトギス俳句大会

炬燵舟時間ゆつくり動き出
悴みてゐても楽しむ舟路あり
十一月二十日 アサヒカルチャー

時雨なるも晴るるも家路なりしこと
往きに見し雪山消して雨の帰路
十一月二十一日 有恒倶楽部
落葉してなほ限りなき日々あり
落葉して太陽こぼしはじめけり
冬めくといふも油断の朝かな
合流す冬めく旅路戻られて
旅話聞かせたまへと落葉踏み
十一月二十一日 無名会

初時雨八雲旧居に小さき句碑
山の黙なほつづき合ふ初時雨
旅人ともここで落ち合ふ初時雨
初時雨ありし旅路と聞くに
旅終へし人も加はる冬安居
十一月二十四日 時雨会

居眠りも覚めありがたき十夜衆
隼と見し間に失せし急降下
露寒し若き命を惜みつつ
初七日は明日と聞きつつ露寒し
雪の来るまでの訃音となりけり
みちのくの冬を淋しむばかりかな
十一月二十五日 句会と講演の会

ふたたびは会へぬ笑顔を胸に冬
字の癖の清記もうなし納句座
みちのくの雪の消息届かずに
十一月二十六日 野分会
この冬の悲しみ照しゐる仲間
みちのくの冬の淋しさを口にせず
みちのくのことを尋ぬるすべのなく
その席に白き冬薔薇供へられ
十一月三十日 きんぎょ会

冬日和残し旅立ちゆかれけり
冬日和の空と立ち北の冬日和
大綿に影なき日向あることを

廣太郎句帳

廣太郎

平成十八年十一月一日 一水会

ななかまど火種は君の心とも
十一月二日 蕉心会

重鎮の又一人逝き秋惜む
柳散る西に大きな訃報かな
鶴来る君の悌慕ふごと

年尾忌を確と修して逝かれたる
秋灯下のだめカンタービレ佳境
冬支度めく大川の濁りかな
てんご言うたら新走やらへんで
鷗空滑り船澄む水滑る
もう散る気なく耐へてゐる萩かとも
卓上は紅葉黄葉の句会かな
十一月三日 虚字記念文学館投句

文化の日西への旅は欠かされず
十一月四、五日関西ホトギス同人会、大会

十三夜待たずに逝かれたる君よ
花野めく十一階の喫煙所
やや寒きほど値切られてをりにけり
十一月七日 刈谷市民俳句大会

初時雨ありし都心を後にして
神渡連れて新幹線西へ
さりげなく置かれ真弓の実の主張

十一月九日 土筆会

新海苔を炙る女将の手練かな
きらめきをネオンに集め小夜時雨
神鼓打つ音はホ短調神無月
朝時雨湖北の黙を解きにけり
十一月十二日 日本伝統俳句協会千葉県部会

くさめして山門潜る漢かな
落葉踏む音も本山の威厳かな
本堂の表も裏も七五三
冬うらら又音程を外す琴
指先に小春日和を乗せて琴
十一月十三日 朝日カルチャー若草句会

冬紅葉散りゆく前の静寂かな
小春日を纏ひて都心副都心
ビルの窓一つ一つの小春かな
冬紅葉水面明るくしてをりぬ
古への色を尽して冬紅葉
十一月十五日 かささホトギス四百五十号記念俳句大会

小春日に見下されたる祝ぎの旅
冬紅葉祝ぎ色といふ明るさに、
バスの窓貫く小春日和かな
小春日に君との距離の縮まりて
十一月十六日 登高会

子等よりも祖父祖母父母が七五三
大熊手買うて零細企業かな
蓮掘や泥を友とし五十年
高々と熊手の潜る鳥居かな
蓮根掘る足が短くなりゆけり
十一月十八、十九日 中国ホトギス同人会、大会

冬紅葉神を誘ふごとく燃ゆ
冬紅葉歪みし玻璃を画布として
神の旅疲れを解きし湖の黙
冬めきて虚字句碑いよよ小さかり
本丸に上り切つたる咳一つ
十一月二十一日 草木瓜会

狭庭てふ寒竹の子の天地かな
初冬に森羅万象平伏せり
初冬や日本の神八百万
寒竹の錫の兵隊めく子かな
初冬の稲城野風の新しく
十一月二十五日 目黒学園句会

鷹といふ気配万象戦けり
ここよりは獣道とや帰り花
上も下も右も左も七五三
鷹畏れ火の山恐れ島に住む
十一月二十五日 ホトギス社句会

冬野吹く風のトツカータとフーガ
冬野まだ羽音鎮めてをらざりし
一頭に捕鯨船団縮みゆく
第十五歩兵大隊冬野行く
十一月二十八日 若水句会

柀の花の香纏ふ句座となり
一の西何時もの蕎麦屋今日は混み
騒くもの黙せしものに冬の枷
ワイン酌む冬を乗り切る口実に
一の西二の西三の西今宵
柀の花ぼろぼろと香を拵げ

雑詠

廣太郎 選

薔薇といふ漢字が好きで薔薇咲かせ
 薔薇咲いて薔薇薔薇薔薇と薔薇の咲く
 風遊びみるところとも薔薇の園
 さう言はれても暑し暑がり屋には
 山を見て来しサングラス今日は海
 跳ね跳ねて夕立の脚の直立す
 菖蒲湯のじわりと熱し手術痕
 明易しペースメーカー正確に
 ペースメーカーに守られぬる汗よ
 霧を歩しても笑ひこけ娘等若し
 タイミングずれて光りて群れ蛩
 素通りの蝶よ咲く花無き庭を
 里山は父母の世の風夏わらび
 紫陽花に六甲の彩ありにけり
 黒南風や犬小屋に犬音もなし
 はまゆふや夏井ヶ浜の群生地
 はまゆふや玄界灘を望みたる
 きりぐす人に会はずる岬みち

熱海 嶋田一步

同

八尾 岩垣子鹿

同

相模原 木村享史

同

熱海 嶋田摩耶子

同

神戸 山田弘子

同

福岡 松尾緑富

同

同

今年また旅をせぬまま夏帽子
 掬はるる金魚が幸せかも知れず
 噴水の風七色に乱れけり
 蜘蛛の囀の張り終るまで温泉に浸る
 青嵐湖に構へし彦根城
 監視員似付かぬ白さ海開
 緑蔭といふやすらぎの太古より
 一院のあれば一緑蔭のあり
 天を行く風地に降りて涼風に
 晴れてゐて山のあなたの日雷
 月見草はや力抜く朝まだき
 はつたいを口から吹いて笑ひけり
 日差し来て若葉萌えたつ小城下に
 遠近のさだかならざる老鶯に
 草笛を吹く学童とすれちがふ
 明易やみな虚子を知る人ばかり
 それぞれの語る歳月明易き
 皆虚子の世を語るには短き夜
 紺の衣に白の帯しめ蜻蛉生る
 途切るるを以て初蟬の調べとす
 その辺のものとし鳩と振花と
 棘ささる大きな跣足裏返す
 造りたる闇を閉ぢこめつつ茂る
 鮎をとることに二人の多数決

八王子 原三猿子

同

吹田 宮崎 正

同

東村山 村松紅花

同

榎原 稲岡 長

同

たつの 浅井青陽子

同

長岡 安原 葉

同

大阪 蔦 三郎

同

香川 湯川 雅

同

同

雑詠句評（十月号より）

仁義・一步・純也

暮潮・昭代・くに彦

しげ人・比奈夫・雅

弘子・廣太郎

青い鳥赤い鳥ゐて囀れり 仙台 小島左京

鶯をさきがけとしていろいろな囀りが聞こえるようになると、野山は一斉に賑やかになる。掲句は、作者が囀りの中に青い鳥と赤い鳥がいるのに気付いたとき、夢のような幸福感を味わったという句意である。その幸福感とは何か。一つは、青い鳥すなわちメーテルリンクの童話の世界にいるような心地になったこと。もう一つは、赤い鳥すなわち鈴木三重吉の童話童謡の世界にいるような心地になったことである。そして作者のような心地が、掲句となつて生まれてきたのである。（仁義）

外国の風景だろうか。季題「囀」は、どちらかというと聴覚的

な響きがあり、句に詠む時はあまりその姿に着目していない事が多いのではないかと思うが、反対に、青や赤の原色のな色を詠んだ事により、視覚的な興味も加わり、より拡がりを見せている。何かメルヘンチックでもある。（廣太郎）

戻り来ぬ登山日記と亡骸と 徳島 多田まさ子

山で遭難され山で亡くなられたのは作者の近親の方であろうか。

そして、その近親者とは所謂アルピニズムの登山家であった。という事が分るのは此の句の季題となる登山日記という中七の語である。元気で出掛けて行った人が死体をなつて帰つて来た。そして最も大切な遺品として最後まで身につけていた物としての登山日記であった。それは古く汚れた傷んだ物かも知れないが遺族にとつては最も貴重なものとなる登山日記である。客観した句であるが故に余韻がそして作者の心情がひしひしと伝わってくる。（一步）

察するに余りある事であるが、山で遭難された親しい方であろう。外国の山であれば、御遺体が戻るまでには時間がかなり、その知らせから、無言の帰宅まで、残された者の胸中是如何ばかりであろうか。季題「登山」が、これほどまでに切実に詠まれた句を筆者は知らない。（廣太郎）

天地有情

江子選

泰然と百寿の昼寝三時間
 豊中 瀧 青佳
 文明を昔に戻し涼みたし
 同
 明易の大往生でありにけり
 長岡 安原 葉
 去年偲べとて配られしさくらんば
 同
 午睡覚めまだまだありしいのちかな
 たつの 浅井青陽子
 日脚伸ぶ茶の間より来る笑ひ声
 同
 浮人形浮きみて浮きたがつてみず
 神戸 後藤比奈夫
 梅雨茸といひて正体定らず
 同
 ようおいでたなもしといふ涼しさに
 東京 稲畑廣太郎
 草引いて愚陀仏庵に客待てり
 同
 心太突く知恵いまだなき童
 榎原 稲岡 長
 花合歓の色の段差や仄めきぬ
 同
 藤棚の懸る神橋こもごもに
 福岡 松尾緑富
 咲き盛る藤棚かくも人出あり
 同
 夏萩の咲いて流れし月日かな
 八王子 原 三猿子
 世の隅に生き永らへて露涼し
 同
 風もまた句碑も薫るといふことを
 熊本 岩岡中正
 句碑いかにおはすらむ緑蔭を訪ふ
 同

月見草こんな咲きし湖畔かな
 川西 阪本ゆたか
 夏炬の火ありてよろしき奥信濃
 同
 まだ雨の乾かぬ木椅子夏木立
 神戸 山田弘子
 雨蛙森の明日へ声を張る
 同
 迷路めく町並自在夏燕
 吹田 宮崎 正
 せせらぎの音を集めし半夏生
 同
 姉いますごとくに風や月見草
 箕面 井上浩一郎
 大事もう抱ふるは無く夜の秋
 同
 虹立たせ里山窓に近づけり
 東大阪 東野太美子
 六甲の此処を下れば合歓の花
 同
 森揺れて五月の風を染めにけり
 大阪 塙 告冬
 海五月汀に白き音寄する
 同
 わが影と語り合ひつつ草を引く
 神戸 長山あや
 句の道は風のままにと道をしへ
 同
 出窓なるベコニアに雨日曜日
 東京 今井千鶴子
 ベコニアや今日はどこへも出かけない
 同
 莖立ちて不易流行ありにけり
 福山 竹下陶子
 杖ついて花に來給ふころざし
 同

天地有情句評

汀子

草引いて愚陀仏庵に客待てり 東京 稲畑廣太郎

愚陀仏庵の現在を語り子規、漱石を偲ぶ。

心太突く智恵いまだなき童 樺原 稲岡 長

幼子の成長過程を通して心太を描く。

藤棚の懸る神橋こもごもに 福岡 松尾緑富

神社の境内にある盛りの藤棚が想像される。

夏萩の咲いて流れし月日かな 八王子 原三猿子

夏萩庵と称した三猿子居を懐かしむ作者のご生涯。

風もまた句碑も薫るといふことを 熊本 岩岡中正

風薫る中での句碑除幕。

月見草こんなに咲きし湖畔かな 川西 阪本ゆたか

湖畔の月見草に寄せる作者の詩情。(以下略)

文明を昔に戻し涼みたし 豊中 瀧 青佳

今の世に真摯な警鐘を鳴らす作者の来し方。

明易の大往生でありにけり 長岡 安原 葉

四月八日の虚子忌に遷化された堀前小木菟氏のご生涯。

日脚伸び茶の間より来る笑ひ声 たつの 浅井青陽子

心豊かな日々を季題に託した作者。

浮人形浮きぬて浮きたがつてぬず 神戸 後藤比奈夫

浮くように出来ている浮人形のからくり。